

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

伝統社会に生きる女性の幸福向上のための開発論-ネパールの旧王都パタンにおけるネワール民族の女性自助組織「ミサ・プツァ」の自発的な活動を事例として-

氏 名

竹内 愛

論 文 内 容 の 要 旨

GDP などの富裕度に代わる暮らしの豊かさを分析するアプローチとして構築された「ケイパビリティ・アプローチ」とは、人間の「良き生」(well-being)等の達成された「結果」に焦点を当てるのではなく、個人のケイパビリティ(潜在能力)を拡大することで、人生における選択の自由の幅を大きくすることに焦点を当てる。従って、当人が最終的にどんな選択をしようとも、当人の意見を尊重するという点で、今までにはない「多様性」を尊重した画期的な開発論であり、開発側と現地の価値観との「対話」をするためにも有効なアプローチである。伝統社会の開発において、開発者側の普遍的理念や開発目標と、開発享受者である現地女性の現実の選択行動との間に発生したズレは、地域の特性や人々の多元的価値観に起因するものであり、アマルティア・センの「ケイパビリティ・アプローチ」では、女性自身の選択を尊重して干渉しないし、選択行動に至った社会的、心理的な要因については追求しない。筆者は、財を得た後において、同等のケイパビリティを持つ複数の女性たちが、財を機能へと変換する過程において、個人の願望に沿った自由な選択(ケイパビリティ発揮)ができるかどうか個人の所属する「集団」等のバックグラウンドによって異なってくるので、ケイパビリティ発揮のための促進要因と抑制要因についても考えなくては、当人たちの望む本当の自由の選択ができないのではないかと考える。

従って、本論文では、「伝統社会に生きる女性の幸福向上のための開発論-ネパールの旧王都パタンにおけるネワール民族の女性自助組織『ミサ・プツァ』の自発的な活動を事例として-」と題して、ケイパビリティ発揮における個人間の格差に注目し、ケイパビリティの発揮に影響を与えるキーパーソンや様々な社会的、文化、宗教的な諸要因について文化人類学的フィールドワークを基礎として解明し、さらに、開発実践は、どのような視点を持ってなされると女性たちの願望に沿うことができ、女性たちの幸福度を増すことができるのか、新たな開発論を提示することを研究目的とする。

パタン市に居住するネワール民族の社会には、父系出自制、ヒンドゥー教的女性の理想像、ケガレ観、家父長制、長幼の序等が複雑に絡み合う「ジェンダー構造」が存在している。男性は出自継承権を持ち、女性に比較して社会的権限が大きい。一方、女性は、男性に比べて社会的、文化的、経済的に劣位に置かれてきた。女性は、結婚後、親族内という狭い生活世界に位置付けられ、そこで夫や夫の父系出自集団に対して、献身的に仕えなくてはならない。さらに、「バギャティ」と言われる自分の頭を相手の足につけて敬意を払う挨拶を夫や親族に対して日常的に行うことで、親族内での自分の立場を再確認させられる。逸脱行為は周りの目が

他律性となり、抑えられてきた。

1990年代、パタン市に、地元 NGO によって、女性の経済的自立を目指した女性自助組織「ミサ・プツァ」が導入された。伝統的に、女性は、家族、親族内という私的領域に留まって生活をしてきたが、家の外に出て、マイクロクレジット、職業訓練、識字訓練など「雇用創出のための活動」や「派生的な活動」である祭の参加、地域活動を積極的に行うようになった。女性たちは、自発的に、次々と自分たちの居住地に「ミサ・プツァ」を設立するようになり、筆者の 2015 年 11 月調査時点で、パタン内に約 180 のグループが存在している。

「ミサ・プツァ」は、地域毎に設立されるため、カースト別住み分けをしているパタンでは、メンバーは基本的には同カースト集団で構成されている。農民カースト「ジャプ」の「ミサ・プツァ」は、他カースト集団のものより数も多く、活動も活発である。ジャプ女性たちは、自集団（コミュニティ、カースト集団）に対する利他的な志向を持っており、開発本来の女性の経済的自立を目指す活動ではなく、派生的な「地域活動」に意義を見出し、地域のニーズに合わせて多様な活動を行い、地域の生活レベルを上げようとしている。例えば、コミュニティのための簡易クリニック運営、男性儀礼執行組織「グティ」の手伝い、地域内の諍いの調停役、寺院や道路の掃除、道路の舗装等を行っている。女性たちが、これまでにはない新たな発想で、男性にできなかった活動を次々と実施しているのは、女性の本来持つ「コムニタス」としての潜在的創造能力が発揮できていると考えられる。そして、ジャプ女性たちの「ミサ・プツァ」が社会に定着し、活躍できている理由としては、彼女たちをサポートしている「開発ミドルマン」や「組織メディエーター」の存在が挙げられる。それらが、開発側と伝統社会との仲介の役割を果たしている。そのため、ジャプ男性たちから「ミサ・プツァ」の活動が認められ、女性たちは外で活動することを許されるようになり、彼女たちの社会的な役割が生まれ、コミュニティにおける社会的地位も向上しており、意図せずして、伝統的な「ジェンダー構造」を変革できている。「ミサ・プツァ」の多様な活動によって、確実に、女性の社会的ケイパビリティは拡大していると言える。

現行の開発理論では、「個人」に焦点を当てて、開発享受者が経済的自立を達成することでエンパワメントを果たすことを重視しているが、ネットワーク社会では、女性たちが職業訓練やマイクロファイナンスなどをして、起業を果たす女性は現実には少ない。その理由の一つとして、女性が本当に望んでいることとは、家族、親族の社会的な成功やコミュニティ（自己のカースト集団）の台頭であり、女性たちは、決して「個人」の幸せだけを望んでいないことが聞き取り調査や参与観察から明らかとなった。彼女たちが「ミサ・プツァ」で行っている「地域活動」は、強制されてやらされているのではなく、彼女たちの「集団」に対する「利他的な志向」によるものである。伝統社会の女性のための開発を行う際には、「個人」のみに焦点を当てるよりも、まず、女性たちが所属する「集団」（カースト集団やコミュニティ、親族、家族）の生活水準、経済的水準、教育水準を向上させることが優先課題と考えるべきである。なぜならば、女性たちの周りの人たちの幸せが彼女たち自身の幸せにもつながるからである。つまり、女性が潜在能力を発揮し、個人的な問題を解決して幸せを向上させていくためには、「個人」だけに焦点を当てても限界があり、所属する「集団」全体にも注目しなくてはならないのである。したがって、女性たちの属する「集団」のエンパワメントを一つ一つ達成していくことを最優先とした上で、それと並行的に女性たち自身（個人）についての状況も改善していくことが、最も女性たちの目線に寄り添った開発となるのではないだろうか。伝統社会における開発では、「個人」だけではなく、「集団」のケイパビリティを最大限引き上げることを考える必要があることが本研究によって明らかになった。